

イギリス製のスペイン内戦映画『大地と自由』を観る

1997/1/17

石塚秀雄

昨年の暮れも押し迫ったある日、神保町の岩波ホールで『大地と自由』というスペイン内戦を題材にした映画を観た。スペイン映画だと思っていたが、ケン・ローチというイギリス人監督の作品であった。映画はジョージ・オーウェルの『カタルニア賛歌』などを多少下敷きにしていると思われた。義勇兵のことを英語ではボランティアと言うが、スペイン内戦ほど、ボランティアや連帯が重視されたことはないであろう。

主人公はリバプール出身の失業中の若者である。1936年リバプールでスペイン支援の映画集会が開かれ、スペイン人民兵が「反ファシストの戦いは、全世界の人々の戦いでもある。われわれは正義と平等を約束する社会を夢見ているのです」と呼びかけ、会場は「ノーパサラン（奴等を通すな）！」というシュプレヒコールで一杯になった（このスローガンはスペイン共産党の「ラ・パッションナリア」こと、スペイン北部のアストリア出身のドロレス・イバルリ女史が叫んで、共和国側の合い言葉となったものである。彼女が1989年にマドリッドで94歳の高齢で亡くなったときは、スペインの各紙でも大きな追悼記事がでた）。

会場にいた失業中のデービットは「俺はスペインに行く。どうせ仕事はみつからないし」と、心配顔の恋人に告げて、パスポートも持たずマルセイユまで密航船でいき、ピレネー山脈を歩いて越えて、無賃乗車でバルセロナに向かう。赤っぽい大地の中を走る列車の込み合った車内には鶏を連れた農婦もいる。デービットは、車掌が検札に回ってきたとき、向かいに座っていた共和国側民兵に「書類はもっているのか」と聞かれて、イギリス共産党員証を見せる始末。それで民兵は彼にカタルニアのアナキスト政党POUMの書類を渡してやる。車掌は、デービットが義勇兵としてやってきたと民兵たちに言われて、「それなら鉄道も労働組合が支配しているから、タダだ。」と逆にデービットに、お礼を言う。

こうした猪突猛進とも見える純な情熱だけで多くの若者が自由を守るためにスペインにやってくるのであるが、集められて軍事訓練をやると、そのような「退屈な」エキササイズを嫌がって早く前線に出たいと文句をいう者も出てくる。

現在でもボランティア活動と専門性の関係が問題になっているが、専門性の軽視は、専門的なモラルの軽視につながる恐れがあるだろう。一般的な目的の正しさだけに眼がいて、プロセスを軽視しがちになる。

だいたい戦争において、兵隊、軍人として訓練を受けた集団と、言葉もよく通じない者が集まったり、素人が戦うということだけを考えても、勝ち負けは目に見えている。以前、ヘミングウェイ原作の『日はまた昇る』というグレゴリー・ペック主演の映画で、主人公はやはりスペインへ義勇兵として参加して、戦闘中のどさくさの中でスペイン人上官に言葉が通じないために、敵前放棄と見なされて拳銃で撃たれてしまうという、なかなかつらい場面があって、

ボランティア組織の統制の問題、言語上のコミュニケーションの問題などいろいろ考えさせられたことがある。

映画では、捕虜になった反乱軍の将校が尋問されて「答えるものか。これでも職業軍人だ」と胸を張って、さらに、兵は命令に従うかと聞かれて「もちろん、本物の軍隊だ」と答える場面がでてくるが、それは二つの陣営の対照を示すものの一つであろう。

デービッドは、アナキスト系グループに入って前線で、乏しい武器の中で戦う。仲間の女性民兵の一人を売春婦だとみんなに言い聞かされて、からかわれたとは知らずに、彼女に声をかけに行き、逆に説教を食らうなどということもある。このように、「普通の」青年であるデービッドも、次第に共産党とアナキストとの対立に巻き込まれていく。共産党員である彼は、アナキストたちが「彼らはわれわれを社会ファシストだとしてつぶしにかかっている」という共産党非難を信じることができずに、いったん彼らを離れてバルセロナの共産党系の突撃警備隊に配属されるが、彼の任務は反乱軍と戦うことではなくて、アナキストたちに対して通りを挟んでビルから互いに撃ち合うことであった。失望した彼はイギリス共産党員証を破いて再び仲間の元に戻るのだが、このグループも結局、仲間であるはずの共和国軍から非合法化されてしまう。

私が後で家に帰って年表を見たところによると、アナキスト政党ポウムが非合法化されたのは1937年6月16日で3日後の19日にはビルバオがフランコ国民党軍に占領されている。私は、戦争は最初に重要地域として戦われたスペイン北部戦線つまりバスク戦線が反乱軍に占領されたことにおいて、基本的に決着がついたと考えている。重工業地帯が戦時経済に果たす役割はとても大きいと思われるからである。

スペイン内戦での共和国側の内部対立はよく知られるところであるが、悪玉善玉論的解釈よりも、労農同盟のあり方をめぐる対立が原因であろう。それはこの映画でも、村の農民たちによる農地の集産化の討論に現れている。映画の原題は「LAND AND FREEDOM」だから「土地と自由」というのが正しいテーマであろう。こうした問題は、スペイン内戦では、北部での問題ではなくて、中央部からとりわけ南部での問題である。スペイン北部にはアナキストの影響力は比較的弱いからである。

さて映画の中では、ある貧農が自分の土地が欲しいのだが、反ファシズムの戦争中ということもあり、農地の集産化は村人の多くの賛成するところになってしまう。集産化、労働組合化、社会化というのが内戦中の共和国の経済政策のスローガンであったが、この問題をめぐっての共産党とアナキスト系動きは、非常に複雑であった。しかし、概して言えることは、共産党が次第に農場や工場の集産化を否定していったということである。その理由は、集産化の動きが中央の統制に従わぬ非中央政府型あるいは分権型をとり、またそれは小農民の支持を得にくいということや、集産農場などが共和国政府に税金を払わないということなどであった。一方、アナキスト側にしても、農村労働者の立場からの農業集産化が強調され、小農民の気分は無頓着であり、また工場や消費についても集産化を主張したものの、所有制度廃止という理想主義に固執して現実の社会構造を軽視したきらいがあった。こうした動きは共和国政府の税金徴収を低下させて、そのために何トンもの金塊をソ連に渡して武器を買おうとしたことは有名である。

共産党派にせよアナキスト派のいずれの側にせよ、国有化か集団化という二者択一という点

3 イギリス製のスペイン内戦映画『大地と自由』を観る

で、また労働組合や政党がコントロールする経済組織の確立という点で、さらに個人主義的な立場に対しては硬直した対応すなわち、無視か妥協かの態度しか取れなかったという点で、大きな限界があったと思われる。やはり集産化、社会化という問題は、協同組合化という視点、現在で言えば社会的経済セクターの重視ということで、個体的所有と共同所有を統合的に把握する必要があったのではないか。

映画は最後に、内戦の中からイギリスに戻りやがて年老いたデービッドの埋葬に際して孫娘が、祖父の遺品であるスペイン内戦から持ち帰ったノートから、ウィリアム・モリスの詩を読み上げる。「誰も敗者とならぬ戦いに参加しよう。たとえ死が訪れても、その行いは永遠なり」と。

モリスこそは協同組合的な社会を構想した人物であるので、監督の思い描く社会像というものがなんとなく想像できたのである。またモリスは工芸作家としても、ひと時代前の職人的な労働のあり方を重視して、イギリス人の骨董趣味を増長させた人だと思う。

またこの映画では「インターナショナル」や「ワルシャワ労働歌」などが歌われたので、久しぶりに、ふさわしい状況の中でこれらの歌を聴くことができた気がした。最近のイギリスの社会学者や政治経済学者の論文を覗いて見ると、社会の今後のあり方について新しい議論を展開しつつも、その基礎には、しっかりとマルクス主義的な理論をベースにしている人が多い。イギリス人の古いものを容易に捨てない精神はここにも生きているのではないだろうか。

以上